

## 都市の模倣—「小京都」と呼ばれる都市を例に—

建築デザイン研究室 A00T326 松本宏喜

### 1. はじめに

中世期に京都を模した都市で、現在「小京都」と呼ばれる都市が存在する。しかし、「小京都」は京都を模した都市であると言われるにも関わらず、一見すると京都を模したとは分かりにくく、似ているとは思えない。本研究ではこれら「小京都」を取り上げ、都市の模倣について見ていくことにする。

### 2. 研究の目的

古代より理想都市として捉えられてきた京都を「小京都」がどのように模倣したのかを分析し、「小京都」がどのように成立しているのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、京都の都市の要素のうち何を模倣し、そしてそれら模倣する要素が土地や時代のコンテキストから影響を受け、どのように成立しているのかについて分析・考察を行う。

### 3. 「小京都」成立の背景

「小京都」成立の背景は大きく二つある。一つは、応仁の乱（一四六七）により京都の市街が衰退し、それに伴い京都を逃れ、地方に疎開した公家たちが、京都での生活を名残惜しみ自らの土地に京都を再現しようとした。もう一つは地方の武家が上洛の度に見る京都の町に憧れ、自らの土地に京都を作り出したものである。

### 4. 「小京都」成立の要素による事例分析

本研究では、中世期に京都を模して作られた都市のうち、比較的資料が手に入る高知県中村市・山口県山口市・島根県津和野町を分析対象とする。京都の何を模倣したのかに関しては模倣された要素を都市ごとに形態的・文化的要素に分類し、分析を行う。そして次にその模倣された要素が模倣される際にどのような影響を受け、形成されるのかを分析する。

#### 4-1. 模倣要素の抽出

ここでは模倣したとされる要素を抽出し、京都を自らの土地に再現する際、どのように捉えていたのかを分析する。

##### ■事例1：中村

##### <形態的要素>

- ・地勢：周囲が山に囲まれ、二つの川に囲まれた地形である。東方にある山を東山と呼び、四万十川・後川をそれぞれ桂川・鴨川に見立てる。
- ・町割：南北三本、東西二本程度の互いに直交する街路
- ・神社：須賀神社、不破八幡宮はそれぞれ京都の八坂神社、石清水八幡宮を勧請したものである。
- ・寺：配置の類似から石見寺を京都の延暦寺に見立てる。

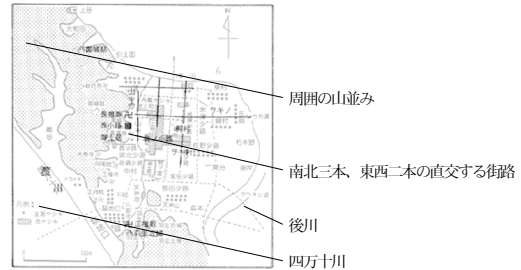


図1：中世期の中村想定図

##### <文化的要素>

- ・地名：京都にある逢坂、鳴滝といった名前を付ける。
- ・通り名：京都にある名前に似た佐野小路や西小路などが使われていた。
- ・祭り：京都の大文字山での送り火が、移植された。

##### ■事例2：山口

##### <形態的要素>

- ・地勢：京都と酷似した土地で、三方を山に囲まれ、盆地である。中央を流れる一ノ坂川を鴨川に、榎野川を淀川に見立てている。
- ・町割：町全体をみると図2、3のように不整形であるが、城館の周りは京都の条坊制を意識した正方形に区画されている。
- ・神社：八坂神社、古熊神社がそれぞれ京都の祇園社、北野天神を勧請したものである。



図2：山口古地図

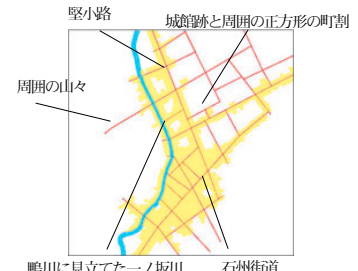


図3：山口「小京都」要素図

##### <文化的要素>

- ・通り名：京都にある名前に似た大殿大路や奥小路などが使われていた。
- ・祭り：祇園会で行われていた鷲舞が祇園社を勧請した際に移植された。
- ・日用品：京都で使われていたかわらけ<sup>2</sup>が地元で作られるものがありながら持ち込まれ、使われていた。
- ・言葉：京都の言葉を使わせ、方言を直させようとしたという伝説が残る。<sup>3</sup>

##### ■事例3：津和野

##### <形態的要素>

- ・弥栄神社、稲成神社はそれぞれ京都の祇園社、伏見稲荷大社を勧請したものである。

## ＜文化的要素＞

- ・祭り：京都祇園会で行われていた鷲舞が山口を通して伝えられた。

津和野の模倣要素については要素が少なく、他の都市に共通する地勢・町割が模倣されていない。これは以下のように説明できる。津和野は京都を直接模倣したのではなく、山口を通して間接的に京都を模倣したのである。山口の町を形成した領主である大内氏と関係がなかった時代に津和野という土地の選定が行われ、城下町が形成された。そしてその後、大内氏と姻戚関係にある津和野の領主吉見氏が京都模倣目的の神社の勧請、それに伴う祭りの移植を行ったのである。

以上の分析より、都市を表面的な形態だけではなく、祭りや生活様式などを包括する文化の総体として模倣しようとしていたことがわかる。

### 4-2. 模倣要素に内在する関係性

では次に、模倣要素がどのような影響を受けて形成されるのかについて要素ごとに分析を行う。

#### イ. 地勢

山口という場所の選定については京都を模倣する目的による京都と似た地形であるからという理由の他に二つがある。一つ目は周囲が山に囲まれているということからそれを軍事目的で自然の要塞として利用しようとしたこと。もう一つは石州街道・堅小路という二つの街道が交差する交通の要衝であったため、それらを利用しようとしたという目的である。

中村については京都からの下向先として選定した理由として京都と似た地形であったことが挙げられるが、山口と同様に他の理由もある。一つ目はつながりのある豪族の土地であったこと。もう一つは二つの川を利用した水運による貿易という目的がある。

#### ロ. 町割

山口では、石州街道・堅小路という二つの街道とその周辺に発達していた市町により、京都を表す碁盤目状の町割は大内氏城館の周辺が正方形の町割になっているのみである。これは本来、面的な碁盤目状の町割が土地のもつコンテクストにより点的なものとなっているといえる。中村では、すでに存在していた二本の直交する市町の街路を基本にして、中世期には南北三本、東西二本程度の町割があった。京都のように碁盤目状とまで至らなかったのは土地の大きさが影響しているのであろう。これは、元々の街路の利用と土地の大きさと京都を表す碁盤目という関係から成り立っている。

#### ハ. 神社

津和野の弥栄神社は京都の八坂神社を勧請したものである。それぞれの配置に注目し、比較分析を行う。津和野の弥栄神社は、京都模倣という目的と同時に当時の応永の水という天災を動機としている。八坂神社が本来持つ疫病退散や水神信仰という性質により津和野川沿いに建立するという配置が決定されている。そのため図4、5を見てわかるように京都では市街の東側にあるという配置に対して、津和野では市街の南西の津和野川沿いに位置し、京都とは似ていない。

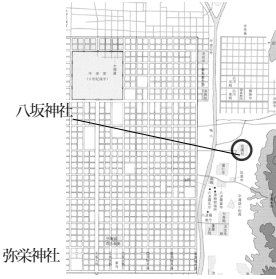
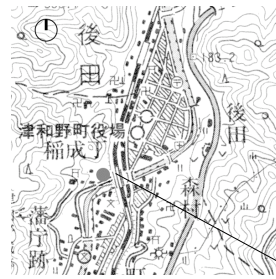


図4：津和野町・弥栄神社配置図

図5：京都・八坂神社配置図

## 二. 言葉

山口における民衆に京都言葉を話させようと言い伝えについて見ていく。これは元々の言葉（方言）というコンテクストを無視し、京都模倣という目的のみで成立させようとするものである。

### 4-3. 小結

分析により模倣要素に内在する関係性は大きく次の3つにより生じていることがわかった。

- ・土地のコンテクスト（土地形状・既存の街道・天災）
- ・京都模倣目的（京都と似た地勢・碁盤目状の町割が京都を表す・京都と同じ言葉を使わせる）
- ・京都模倣以外の目的（軍事的・交通の利用・水運の利用・神社のもつ本来の性質）

## 5. 考察

分析より模倣要素が上述の3つが作る関係性により成立することが明らかになった。このように多様な関係性によって成立しているため、「小京都」が京都を模倣した都市であると分かりにくくなっているのではないだろうか。

京都の言葉を話すようにさせるという要素は京都模倣という目的のみで成立させようとしている。この要素の内側には方言や京都模倣以外の目的といったものを作る関係性は存在しない。一方、地勢や町割、神社などは土地のコンテクストや京都模倣以外の目的によって作られる様々な関係性を内在し成立している。

模倣要素そのものではなく、模倣要素に内在する関係性が「小京都」という都市を成立させているのではないかと考えられる。それは京都言葉を話すようにさせるという一元的に決定された要素は現存しなく、その一方で神社や町割といった多元的に決定された要素は現在まで存続しえたという事実からいえるのではないだろうか。

## 6. 結論

模倣要素を分析することで、模倣要素は様々な関係性をもち、その関係性により成立していることが明らかになった。その多様な関係性が「小京都」が京都を模した都市であることをわかりにくくしている。しかしその模倣要素に内在する関係性が「小京都」を成立させていることがわかった。

<sup>1</sup> 神仏の分身、分霊を他の地に移まつこと。

<sup>2</sup> 素焼きの陶器。中世期には連歌会・茶会などを催す際に使われていた。

<sup>3</sup> 『陰徳太平記』正徳二年（一七一二）刊。一四九〇から約二百年間のことについて西日本を中心に記録したもの。